

イスラームと日本

本レジュメでは、日本のイスラーム教徒のアイデンティティと宗教意識についてまとめである。

本論文でははじめに、イスラームの教義について触れ、日本においてイスラーム教がどのような歴史を築き上げてきたかについて述べる。次にその歴史の中で誕生した「日本のイスラーム」について、教義と思想の面から論じていく。さらに近年急増した日本人女性のイスラーム教徒と、それ以前から改宗していたイスラーム教徒の認識の相違について論じた上で、最後に日本人イスラーム教徒のアイデンティティについて考察していきたいと思う。

1. 教義

(以下は wikipedia より抜粋)

六信五行

イスラム教の信仰の根幹は、六信と五行、すなわち、6つの信仰箇条と、5つの信仰行為から成り立っている。

六信は、次の6つである。

神（アッラー）

天使（マラーイカ）

啓典（クトゥブ）

使徒（ルスル）

来世（アーヒラ）

定命（カダル）

このうち、特にイスラームの根本的な教義に関わるもののが神（アッラー）と、使徒（ルスル）である。ムスリムは、アッラーが唯一の神であることと、その招命を受けて預言者となつたムハンマドが真正なる神の使徒であることを固く信じる。イスラームに入信し、ムスリムになろうとする者は、証人の前で「神のほかに神はなし」「ムハンマドは神の使徒なり」の2句からなる信仰告白（シャハーダ）を行うこととされている。

また、ムスリムが取るべき信仰行為として定められた五行（五柱ともいう）は、次の5つとされている。

信仰告白（シャハーダ）

礼拝（サラー）

喜捨（ザカート）

断食（サウム）

巡礼（ハッジ）

これに、奮闘努力（ジハード）を6つめの柱として加えようという意見もあるが、伝統的に

は上の5つである。

これらの信仰行為は、礼拝であれば1日のうちの決まった時間、断食であれば1年のうちの決まった月（ラマダーン、ラマダン）に、すべてのムスリムが一斉に行うものとされている。このような行為を集団で一体的に行うことにより、ムスリム同士はお互いの紐帯を認識し、ムスリムの共同体の一体感を高めている。集団の一体感が最高潮に達する信仰行為が巡礼（ハッジ）であり、1年のうちの決まった日に、イスラームの聖地であるサウジアラビアのメッカ（マッカ）ですべての巡礼者が定まったスケジュールに従い、同じ順路を辿って一連の儀礼を体験する。

【豆知識】

- ・信仰告白は以下の様な文言。

لَا إِلَهَ إِلَّا اللَّهُ مُحَمَّدٌ رَسُولُ اللَّهِ
ラーイラーハイッラッラー イブンムハンマドゥンラスールアッラー

意味は『アッラーの他に神はなし。ムハンマドはその使途なり』である。

- ・移動中だったなど、何かの理由で礼拝ができない場合は繰り越すことができる。
- ・ラマダン中の断食は日が昇ってから落ちるまでとされ、夜の食事は許可されている。その為イスラム圏ではラマダンの夜は出店が並び、さながらお祭りのような賑わいとなる。また妊婦や病人などの断食は免除される。
- ・イスラームでは利子をとることが禁じられている。その為銀行でお金を借りても利子はつかないし、ローンも組めない……ことになっているが、実際は「使用料」などの名目で利子は存在する。もちろんムスリムの中からも批判の声は根強い。同様のことは性産業にも言える。
- ・所謂ハラルフードは家畜をアッラーへの祈りを唱えながらなるべく苦痛を与えないよう首を一突きに殺したもののことと言う。また豚肉や酒に関する禁忌も深刻で製造過程のどこかで使われていたら食することができない。2001年にインドネシアで味の素が起こした事件で日本側と現地での温度差にもその象徴といえよう。
- ・イスラームにおいて天国に入るか地獄に入るかはその人の善行と悪行の数で決まる。が、人はイスラームに入信した時とメッカに初めて礼拝した時にすべての罪が赦される。正確には天国に入れなかったムスリムは煉獄で罪を償い、しかる後天国へ導かれるが、異教徒は問答無用で地獄に送られ天国に入ることはできない。

2、日本におけるイスラームの歴史について

2.1 開国から戦前

日本で始めてイスラームに改宗したのは、明治時代の新聞記者野田正太郎である。その後昭和に入って以降、新疆、東南アジアなどムスリムが多数を占める地域へ進出する為、政府

が回教政策を主導していたこともあり、日本国内で非ムスリムによる布教活動が進んだ。しかし、これは現地住民を統治するための改宗であり、戦後もムスリムとして生きる道を選択したものはごく小数であった。

2.2 戦後から一九八十年代前半

終戦により国家の後ろ盾がなくなり、日本人ムスリム達が自力でイスラームを布教するようになったのがこの時期である。一方で教義について深く学ぶ為、外国人ムスリムからアラビア語を学んだりアラブへ留学したりといった活動も盛んになった。

また七十年代に二木秀雄によって「日本イスラム教団」が設立された。この教団は多数の改宗者を排出したが、その布教法や教義にはイスラームとしては問題視されるようなものが多い。詳細は第三節で述べる。

2.3 年代後半から今日

好景気に伴ってイラン、パキスタン、バングラデシュなどのイスラーム諸国から多くのムスリムが労働力として日本へ渡航してきた。彼らの多くが男性であったことから、結婚を機にイスラームへ改宗する日本人女性が増え、日本のムスリム人口が増加した。ムスリム第二世代も誕生し、日本各地にモスクやムッサラー(簡易礼拝所)の建設が進んだ。しかし、土葬、礼拝、衣装など、イスラームの教義が日本の慣習と対立することで、地域住民と衝突してしまうこともある。[小村、2015：203]

3. 「日本のイスラーム」について

以上のように、日本人ムスリム教徒を取り巻く状況も、時代により変化してきた。その中では、日本の慣習とイスラームの教義を調和させようという取り組みも見られた。その試みはどう展開し、どのような道を辿ったのか。

3.1 戦前の理解

山岡光太郎は、英領モンバヤで日本人ムスリムになったが、彼は「アッラーは偉大なり」という意味の「アッラーフ・アクバル」という言葉を「天照大神」と解釈し、アッラーと天照大神を同一視していた。[山岡 1912:45-46] イスラーム布教に腐心した有賀文八郎は、

「唯一神」を「天之御中主神」として表現しており、「アッラー」という言葉は用いていない。また「日本イスラム教信仰個條」では、イスラームの道德について述べられているが、愛国心や儒教道德の要素が存在する上、飲酒に関して「健康に害なく、狂態に陥らざる者は恕すべし」と有賀独自の解釈が加えられている。[有賀 1939:38-39]

このように、戦前のムスリム達は、ムスリムとしての自覚はあっても、イスラームを完全に理解していたとは言いがたい。その理由としては、当時日本のムスリム人口が圧倒的に少なく、イスラームの知識を得る方法が少なかったほか、当時の日本人にとって最も馴染み深い宗教が国家神道だったことが挙げられるだろう。

3.2 「日本イスラム教団」について

次に日本イスラム教団について考察する。この団体は、二木秀雄という人物によって設立され、東京都新宿区歌舞伎町の診療所内に事務所が存在した。小村は教団が設立された当時、日本人ムスリムの多くはビジネスや留学の中でイスラームを知り、共感して改宗した人々だった一方で、日本イスラム教団による改宗は、本人の意思とは無関係に入信させられた人と診療所を訪れる中で自発的に改宗した人の二つの型に分けられるが、たとえ後者の人々であっても、改宗は二木秀雄への敬意の結果であって、イスラームの理解やイスラームそのものへの共感から改宗したわけではないと分析している[小村 2015:181-183]では、創設者である二木秀雄はイスラームをどのように理解していたのか。彼の論文「脈打つイスラーム新潮流」では、「日本人にとって、アラブ諸国やイスラームというと、遠く理解を超えたものという認識があり、ある種の異和感と不安を感じるのが一般的だ。だが、イスラームとは宗教というよりも、生活そのものであり、人間そのものである。したがってイスラームの人々は、国という“単位”よりも、人と人とのつき合いを最優先にする」[二木 1980:94-95]と説明している。また一方で「イスラム復権への私見：日本人ムスリムとして考える」では、次のように述べている。

そもそもイスラム教は、アッラーを宇宙の唯一絶対神、創造者、支配者とする。アッラーは形がなく、画像すらない。つまり、アッラーは宇宙律、自然律、換言すれば、真理なのである。その唯一絶対神の前に、ゼロにも等しい微粒子にすぎない人間、われを自覚するとところからイスラムの教義は始まるのである[二木 1981:65]

イスラム教は、実は、日本人が二千六百年有余年も持ち続けている生活様式そのものだ。したがって一億二千万人の勤勉な日本人、すなわち“山和民族”は、潜在的なムスリムそのものだと思っている。布教方針は、実はここにあるといつても過言ではない。[二木 1981:65]

これらの発言から、二木はイスラームの本質を理解した上で、日本人への布教という目的に沿うように、伝統的なイスラームの教義とは異なった解釈を紹介していたことがうかがえる。また「アッラーを信じるということだけで入信ができる」[週刊新潮 1979:121]とも述べており、教義を厳格に守る必要がないという姿勢をとっていたことがわかる。

一方で、教団の幹部であった安倍治夫は、「大乗イスラーム」という独自の思想を持っていた。「イスラームの真髄は、酒を飲むなとか、豚肉を食べるなとかいう規則じゃない。それは小乗的なイスラムであり、コーランは大乗的な宇宙の原理を説いていることに気付いた。親鸞が言う『絶対他力』に通じるものがあると思いました」[毎日 1993 年 9 月 13 日]という彼の発言は、イスラームの教義を重んじるあまり、形式にこだわりすぎることへの懸念を示している。教義を厳格に守るべきではないという態度は二木のそれと共通している。

以上のように、日本イスラム教団による布教活動は従来の布教とは異なり、厳格なイスラームの教義を適応するのではなく、イスラームの真髓を伝えた上で、日本の慣習とうまく調和できるよう布教していたことがわかる。しかしながら、同時代の日本人ムスリムからは「個人としては同胞であっても、団体としては一心同体にはなりきれない」[飯森 2011：34]といった、教団の活動を評価しない声が上がっている。イスラームは教義の改変を嫌う。形式にこだわりすぎることを批判し、精神を重んじることで教義の実践を怠れば、それはイスラームではない別の宗教になってしまう。結局、日本イスラム教団はムスリムの支持も非ムスリムの支持も得られず衰退していった。

4. ムスリム間の認識の相違について

次に、現在の日本人ムスリム達について述べたい。結婚によって女性のイスラーム教徒が増加したことは第二節で既に述べた。それでは、彼女たちはどのようなアイデンティティを確立していくのだろうか。彼女たちのアイデンティティ形成において、重要な役割を果たすのがヒジャーブである。イスラームでは、女性信徒には夫や家族の前以外では髪を隠す布の着用を義務付けている。この布がヒジャーブである。工藤によれば、結婚によりイスラームに改宗した女性の多くは、結婚の際の入信を「形だけの入信」と定義する一方で、先輩女性に習って日常生活でヒジャーブを被ることを実践していく中で「普通の日本人」が対象化され、ムスリムとしての自己覚醒が促されるプロセスを「第二の入信」と位置づけるという。また、自分自身を「不完全な」ムスリムと捉え、先輩ムスリムのような「完全な」ムスリムを目指そうとするのも彼女たちの特徴であるという。[工藤 2008：121-130]そして、彼女たちは自らを夫たち「ボーン・ムスリム(生まれながらのムスリム)」と対極の存在として位置づけ、宗派を超えた「本来のイスラーム」を信じようと模索する。[工藤、2008：163～174]しかしながら同時に、ムスリムがマイノリティにおかれる日本社会の中で、既に獲得した「ムスリム」としての自己に大きく矛盾しない形で日本社会に適応しようという動きもみられる。[工藤 2008：197-205]

これに対して、それ以前の、特に男性ムスリムの場合は事情が異なる。彼らは巡礼、断食、酒などが日本社会の中で理解を得られず、「仕事か宗教か」という選択を迫られてしまうことを問題としている。[樋口 2011：62-64]そしてその解決法として、「(イスラームは)できる限りの最善を尽くすことは求められても、善意と尽力がある限りは信徒としての義務は果たしているという教えなのである。つまり完璧さは必須ではないのだ」[水谷 2011：214]や「もしそのムスリムが俗的な生活に妥協してイスラームの義務行為を怠ったとしても、そのことを気にし、悔悟し、償いの気持ちを忘れない限りムスリムである」[樋口 200：214]というように、いつでもイスラームの教義を優先させるのではなく、時には教えを破ってしまっても仕方がないという立場をとっている。男女間、あるいは新旧のムスリムの間でこれほどにイスラームに対する認識が異なっていることは、日本人イスラーム教徒のアイデンティティが多様であることを示唆している。

5. 結論と展望

この「イスラーム」に関する認識の違いは、何から生じるのだろうか。第一に衣装の違いが考えられる。女性はヒジャーブを着用する分、周囲の非ムスリムたちの視線が集まりがちで、非ムスリムとの差異を認識することが多い。一方で男性は礼拝や禁酒といった教義が日本の慣習と衝突するものもあるものの、ただ外を歩くだけで周囲の注目を集めるといったことはないため、非ムスリムとの差異を恒常的な問題として認識することはない。第二に、時代の違いが考えられる。八〇年代やそれ以前はイスラームについての情報を知る手段が限られており、外国人ムスリムの流入も大規模ではなかった。しかしながらグローバル化の進んだ現代では、インターネットを通じて情報が容易に入手できるほか、東南アジアや他の地域からのムスリムの往来が極めて活発化している。イスラームに関する情報が増加する中で、独自解釈に頼らない「正しいイスラーム」を日本国内で意識し、また実践することが可能になったのではないだろうか。

戦前の活動や日本イスラム教団など、イスラームの教義を日本に調和させるという試みは、イスラームという宗教の性質上難しく、またグローバル化の進展によって外国人との交流が増え、「本場のイスラーム」が流入したこと、歴史的に悉く失敗に終わった。その為日本人イスラーム教徒はイスラームの教義と日本の慣習が起こす摩擦を個々の裁量で解消する必要があるが、その摩擦が却って自らの「ムスリム」としてのアイデンティティを強める場合もある。いずれにせよ、「日本人」であることと「ムスリム」であることは並立せず、その調和あるいは拒絶を試みる中で彼らのアイデンティティは構築されていくようである。この傾向は、日本においてイスラームがマイノリティであり続ける限り普遍であろう。

引用文献表

- PRESIDENT ビジネスパーソンのためのイスラム教入門
(<http://president.jp/articles/-/15032?page=2>)
- 有賀文八郎(1939)「日本の一回教徒として」『イスラム』6号
- 飯森嘉助・樋口美作・水谷周(2011)『イスラーム信仰叢書6 イスラームと日本人』国書刊行会
- 工藤正子(2008)『越境の人類学-在日パキスタンムスリム人の妻たち』東京大学出版会
- 小村明子(2015)『日本とイスラームが出会うとき』現代書館
- 樋口美作(2007)『日本人ムスリムとして生きる』佼成出版社
- 二木秀雄(1981)「“イスラーム復権”への私見：日本人ムスリムとして考える」『自由』262号
- 山岡光太郎(1912)『世界乃神秘秘境アラビヤ縦断記』東亜堂書房